
季節外れの雛嚙栗

霜月黎夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

季節外れの雛罌粟

【Nコード】

N2345A

【作者名】

霜月黎夜

【あらすじ】

キセツハズレノヒナゲシ　もうすぐ二十歳になる奏は、大人と子供の狭間で漂っていた。自分が何をすべきなのか、夢を見失っていた。それを助けてくれたのは、ずっと一緒にいた友人だった。

(前書き)

これはボーイズラブですので、嫌いな方は足を踏み入れないようにして下さい。性的描写はありません……キスくらいです。
では、興味のある方、又は、平気な方はどうぞ。短編ですが、少々長くなっております。

「夏休みはもうあと僅か。

学生として、最後の夏休み。

来年は社会人だ。

なのに、俺……葉坂奏（ハザカ カナデ）は、一日中ぐうたらしていた。

「あー……マジでヤバいなー」

今年で二十歳になるつてのに、危機感がないよな。

ちよつとは復習しないとかが、買溜めしてる本読まないとか、就職活動しないとかが……思うけど、意欲が全然沸いてこないつていうか……

「はあ……」

やらなければいけないつてのは判つてんだよ。

だけど、なんか……疲れた。

「夏休み中、就職活動を必死にしているであろう皆とは違い、俺は一社しか受けてない。しかも、落ちた。

「……俺のしたい事つて、何だろう。何のために働くんだ。大人になるつて、何だ……疲れた。身体が重い……」

別に、落ちた事は気にならない。

自分でも、あの面接は駄目だったつて判る。もつとああすれば良かったとか、今度はこうしようとか思うけど……働きたいつて思う場所がないから、志望動機も曖昧。自分の長所なんか判らないから、自己アピールも出来ない。

「どこでもいい……ちよつと余裕あるくらいに稼げて、好きな事できる時間があれば……どこでもいいんだよ」

心底、そう思う。

「……苦勞を知らないから、言えるんだらうなあ」

そうだ。苦勞なんか知らない。

高校は当時の成績で受かるトコを選んだし、大学は指定校推薦で難なく合格。

ずっと流れに乗ってきた。抗わず、任せてきたんだ。いつだって、俺は主張せず、目立たず、普通に……

「なんか……生きるコトに疲れを感じる。何だコレ。ああ、ダルい……」

「なら、死ねば？」

全く興味が籠っていない声。

横から冷水を浴びせかけてきたのは、友人の如月凜（キサラギ、リン）。小学校からの腐れ縁だ。黒く真っ直ぐの髪を長く伸ばし、結わえもせず背に流して……恐ろしく整った、人形みたいな綺麗な貌してるから、無表情には寒気を感じる。

「死ねるかよ……」

俺はムツとして、凜を睨めつけた。

人のベッドに悠々と寝そべりやがって……俺の漫画雑誌まで読んでいるし……特に用はないとか言いながら、部屋に上がり込んで……傷心（？）してる俺にお構いなしかよ。

「怖いんだろ」

振り返った凜は、小馬鹿にしたように唇の片端を上げる。

ムカツク……

「……怖く、ないさ！」

俺は意味もなく強がった。それを完璧に見抜いて、凜が嗤う。

「なら、死んで見せてよ」

「……」

絶対に言うと思った。

言い返せない。だって、死にたくないから。痛いのも、苦しいのも嫌だ。

「生きるの、疲れたんだろ？」

別に、優しい言葉を期待してた訳じゃないけど……こういう時、普通は励ましたりしないか？

小中高大ずつと一緒なんだしよ……

「ダリイだけだよ……何で皆へーキなんだ？ お前だって、もう卒業だろー？」

負けたくないから、凜に攻撃を仕掛ける。俺ばっか押されて、オモシロくねーもん。

「オレはそれなりに平気だよ。もう内定、貰ってるし」
けど、凜は平然としてる。その上……

「え、ウソ?!」
内定、貰ったの？

「ホント」

「え……」
負けた。

凜に先越された。別に勝負してた訳じゃないけど、悔しい。

……でも、そうだよな。凜は俺よりしっかりしてるし、世渡り上手だからな……

「奏のために頑張ってるんだよ」

一人勝手に悶々としていると、凜が不可解な言葉を投げてきた。

「は？ なんで俺なんだ？ 自分のためだろ？」

こいつが言ってるコト、たまに理解できないんだよ。

何が言いたいんだか思っていると、凜は漫画雑誌を片し、上半身を起こした。

「なあ、奏」

「あ？」

なんか、めちやくちや妖しい笑い方してるよ、この人。怖エー……
ちよつとビビってベッドから離れる俺。

「チュウ、しよっか？」

「は？」

一瞬、異界語(?)を喋ったのかと思った。
何だつて？

「……チュウ？」

何だソレ？

チュウチュウチュウチュウチュウチュウ……

「え……」

チュウ？

チュウって、アレ……唇と唇をくつつける？

……キス？

「はあ?!」

俺と、凜で……？

な、なんで男同士で、キ、キスなんか……??

凜が、くつくつと肩を揺らして笑う。

「何も知らない、真っ白な奏」

艶めいた仕種で、前髪を掻き上げた。

「苦しみも悲しみも憎しみも……何も、本当に何も知らない。綺麗
な人」

な、なんだよ……いきなり、ワケが判らないぞ。

ととう危ない人の領域に!?

いやいや、凜はもうその一線越えちゃってるし……

ハッ!!

いかん。思考が横道に逸れてる……

「……何が言いたいんだよ、お前」

「いつそ、汚れきつてしまえばダルくなる。そんな事、言っ
られなくなる……“生きる”がどういうコトか、よく判るよ。なあ、

一緒に汚れてしまおう……堕ちるトコまで、堕ちてしまおう……?」

首を傾げて、俺の知らない世界へ誘おうとする。

凜が女だったら、完全に吞まれてたかも。でも、凜は男だし……

ガキン時から知ってるし……って、いうか……

「ヒトリでやってるよ。俺に変なコト振るな!」

プイとそっぽを向いてやる。

「奏は、何がしたい？」

その声はあまりに近過ぎて、脳までなかなか伝わらない。

「十二……？」

静かで真剣な質問だったから、真面目に考えてみないといけ
ない……とか思った。

「うわあっ！！」

向き直ろうとしたら、凜が……マジで、かなりヤバい距離まで迫
っっていて、目ん玉が飛び出るくらい驚いた。心臓が軋んだ音を立
て、痛い……

「近いっ！ 離れる、ボケ！！」

何者だよ、コイツ！

なんで、いつの間にこんな近くまで来たんだよ！？

音も気配もしなかったぞ……！！！！

グイグイ乱暴に凜を押しやり、何故か顔が熱かった。

なんだよ、俺……女みたいな反応してる。

俺、変だ……！

凜は俺の力に逆らわず、素直に距離を置いた。

「一体、何だよ……ワケ、判んねエ……」

俺は目を瞑る。それだけでは足りなくて、片腕で顔を隠した。

「何もしたい事がないなら、専業主婦になればいい」

「……俺は、女じゃねえぞ」

何が専業主婦だ。

本当に、凜が判らない。理解できない。

コイツは、何を言っている？

「女じゃなくても、大丈夫さ。オレは奏がイイんだから。オレの世
話してよ」

腕を下ろすと凜は笑顔で。

緩く唇を微笑ませた凜の瞳は、果てしない闇のよう……

「……ッざけんな！ 今でも充分なくらいだ！」
いつも俺が作るメシにありついて、よく寝泊まりしてく。何度か服も洗ってやった……

「自分の面倒……自分で見るよ！！」
怖い。

その瞳で見るなよ。

逃げられないじゃん。

ずっと一緒だったはずなのに、お前が判らない。

誰だよ、お前……凜は？

凜は、どこだよ？

俺が知っている凜は……？

……それって、どんなだ？

俺が知っている凜って、どんな奴だ？

……凜は……俺が知っている凜は、広く浅く人付き合いが巧くて、頭が良くて、他人に隙を絶対見せない。でも、俺には笑ってくれて、時々意地悪で……

俺って、凜の何だ？

トモダチ、だよなあ？

長い付き合いなのに、お前の知らないコトいっぱいある。

「……俺は、ナニ……？」

不覚にも、泣きそうになった。

なんだかテンパってる自分がおかしくて、情けなくて……

「オレの恋人」

確実に、語尾にハートをつけたセリフを吐ぬかしゃがる。

「いつからだよ……」

人の気も知らないで……俺で遊んでんのか？

あー、声震えてんな……次、喋ったらマジで泣くかも。

「小学校で出逢った時から」

そういえば、凜は小二の時に転校してきたんだっけ。それから、何でか側に居るんだ……でも、ソレってトモダチだからだろ？

……思えば、長いなあ……

「奏、料理ウマいだろ」

突然そんな事を言い出す凜。

なに？ 何か食いたいの？

普通だろ……料理なんか。もしかして、何か作ってもらおうとか思っただけに居るワケ？

「奏は手先が器用じゃないか。したい事はないのか？」

喋ったら涙が出そうだったから、首を横に振って応えた。

したい事……俺の夢……何だっけ……

「もう、アクセサリーとかは作らない？ ちょっと前までは、部屋中に散らばってたのに……」

そうだ……ちょっと前って言っても、二年も前、実家にいる時の話だな……リングとかペンダントヘッドとか、オモシロくてよく作ってたっけ……でも、あんなのは……

「ただの……趣味……」

大学に入って下宿した時、全部置いてきた。

だって、好きはずなのに、何も思い浮かばなくて……何か形にしなければと思うと、余計真っ白になっていく。

本気だと思ってた。将来、これで頑張ろうって……

なのに、何も出来なくなった。

大学入学は、そんな現実から逃げるため。

限界、だった。

「ッ」

涙が溢れてきて、慌てて俯く。

今まで、泣いたことなんかなかったのに……笑ってこれたのに……

…凧がおかしいから……

蓋をした、俺の奥に突っ込んでくるから……
普段していたように、笑って誤魔化せない。

「趣味も、転ずれば仕事だ」

「……違う。趣味は、趣味でしかない！」

静かな静かな凧の声に、俺は堪えられなかった。

「趣味は、仕事にならない！ 仕事になんか、ならない……」

「でも、趣味でその仕事を選んでいる人は存在している」

「……そ、んなの、ごく一部の、恵まれた人だけだ……」

「けど、趣味で生きているのは確かだな？」

「……違う……」

否定しきれない。

俺には、判らないよ。

凧の言う通り、そういう人だっただけに確かにいる。でも、俺は違う。

「なら……」

俯いたまましていると、凧の腕が下から伸びてきた。それは、俺を抱き込む。

「オレが時間をあげる」

俺は凧の肩に頭を預けて、男同士で恥ずかしーとかちよっと思いつながら、凧の、名前の通りキレイな声を聞いた。

時間を、くれる……？

「オレが奏のために働く。だから、奏は考える。やりたい事を見つけて……追っていた夢を取り戻せ」

ホント、何言ってるのさ。

なんで、俺なの？

告う相手を間違ってるよ。

俺、男だよ？

「好きな事やってる奏はカッコよかった。もう一回見たい」

ちゃんと人生送ってる凜のがカッコイイよ。

なんで？　なんで？　……疑問ばかりが胸を埋める。

一度失った夢を、また手にすることができると思うか？

「奏次第だ」

俺の頭ん中が筒抜けみたいだ。

凜は優しく、強い言葉をくれる。

凜、なんだな。

凜が優しいの、ちゃんと知ってる……

「あと半年で卒業だ。そしたら、一緒に暮らそう……今も、半同棲みたいなもんだけど」

……どういう意味だ？

一緒に暮らす？

トモダチではない？

「……判らない？」

「……」

「チュウ、してもいい？」

その言い方はやめる。恥ずかしいだろ……

……これって、OK出したら……すべて受けることになる、のか？

俺が声を出せないでいると、凜の手が俺の顔を上向かせた。

「いい？」

すっごい近い。凜がぼやけてよく見えないし。

……いいのか、俺？
キス………するの？
すべて、受け入れるの？
凜は男で、俺も男なのに？

これって、恋愛感情？
俺、そっちの気があった？
……いや、ないな。俺、女の子好きだし。

でも、嫌じゃない………嫌、じゃないんだ………
ずっと一緒だったから？

……凜、だから………

「俺、女じゃねえし………」
それでも、素直にウンとは頷けなくて。

つらつらと女々しく考えてる自分に、自身の性別を確認してみたり………

やっぱり、男同士つてのには抵抗ある、かも。
だって、普通、こういうのって女を相手に告ぐもんだろ？
え、なに、凜には俺が女に見えるの？

「奏がイイ。他の女も男も興味ない。奏以外は、いらない」
うわー………俺、女じゃないのに、なんか、嬉しい。
好きな男から告白された女の気持ちって、こんなん？
なんか、心がフワフワしてる。

ん？
好きな男？
相手が凜だから？

同じ男でも、凜以外では嬉しくない。むしろ、気持ち悪いだろ。

俺、凜のコト、そういう対象で見てたのか？

好き……？

「……俺……俺、も……凜がイイ」

気付いたら、そう告げていて……

柔らかい唇の感触が重なって、離れた。

ただ触れただけなのに、それだけで頭の芯が痺れた気がする。

「奏」

凜が、俺だけにしか見せない温かい笑顔で、愛を囁いた。

俺、その顔好き。

「生きるコトがダルくなったら、オレの世話をするために生きる」

茶化したようなセリフ。

「死んだら、許さない」

大切なのは、想いで……

嬉しくて、嬉しくて、また泣けてきた。

暑さでやられてんのかなー。こんなに涙腺弱かったっけ？

「……凜。好きだよ」

ちゃんと笑えたかな？

俺の気持ち、判った？

俺自身も今はつきり判った。

ずっと一緒に居るのは、凜でなくてはダメだ。

「オレも、愛してる」

凜がすごく幸せそうに微笑むから、今度は俺から凜に口接ける。

……まだ、諦めるには早いよな。

凜のためにも、自分のためにも、もう一度頑張ろう。

だって、完全には死んでいないから……俺の夢。

途中で手放してしまったこと、ずっと後悔してた。

「サンキューな」

照れながら礼を言うと、凜はどういたしましと笑う。

……俺の腰に、腕を回したまま……

知らず、顔が熱くなる。

「元氣出たか？」

「おう」

「なら、告白した甲斐があった」

「……え？」

告白した甲斐って、何だ？

変な言い方だな……

俺の頭を、とんでもない考えが過ぎった。

……まさか、告白は俺をからかうため？

なんで、そう思ったんだ……俺……？

「凜……」

からかってるのか？

グチグチしてる俺が……うざったくて？

天国から、一気に地獄だ。

「……なあ、告白は……本気？」

「違っつて、言ったら？」

「」

唇の片端を上げて晒う凜を、凝視するしかなかった。

胸の奥を抉られたみたいだ。

不安で不安で仕方ない。やっぱり、凜が判らない。

……ダメだ。また出る。ホント、どうしたんだ……

凜に遊ばれて、俺だけ……本気、にして……

「……泣くな、奏」

「ッ知らねえ！！ 出てけよ！！」

ムカツク……ムカツク……

なんで、そんな余裕なんだよ!?

俺ばっかり、振り回されて……!

「嘘だ、奏。嬉しかったんだ」

暴れる俺を、凜は軽く腕に収める。

腕の強さは、言葉以上に想いを伝えてきた。

だって、凜のくせに、ちよつと震えてる……

なんだよ……凜も余裕ねえのかよ……

「ダッセー……」

思わず、唇が緩んだ。オモシロイ……

「人の事、言えないだろ……早合点したくせに。大方、オレがいつものように奏で遊んでると思ったんだろ」

「う……」

ズバリ、言ってくるな……まあ、言う通りなんだけどな。

「……本当は、卒業の時に告白しようと思ってたんだ。でも、待てない。奏に支えが必要なように、オレにも必要なんだ」

凜が物憂げな表情をする。俺には、それが辛かった。

「ありがとう、奏」

「れ、礼を言うのは、俺だよ……」

不意に笑顔になるから、ドギマギした。

「嫌いになられたら、どうしよーって思ってた」

「ど、どうするつもりだったんだ?」

「んー」

首を傾げ、窓を指差す。

「飛び降りてた」

「はあ!?!」

サラリと、当たり前のように……

「だって、生きる意味がなくなるだろー」

「しょうもない理由で生きるな!! ってか、迷惑だ!!!」

「しょうもなくないって。それはもう、奏にオレが必要だってことを思い知らせよう」と

「アホかー！！！！　んなの、お前が死んだら、意味ねえだろ！！」
普通に返してくる凜の相手に疲れを覚え、溜息を吐いた。

「…………アホ」
咽喉にかかった言葉を噛み砕く。
言おうかどうかしようか、迷った。

「…………お前も、死ぬなよ」
淋しいから、とは言ってやらない。
後々、決まりが悪いだろうから…………

「うん」
心底幸せそうな顔をする凜に、俺も笑い返す。

その夜、夢を見た。

淡く輝く世界で、凜が歩いてくる。
俺はぼんやりと立ち尽くしていた。

目の前に来た凜が、両手に包んだ何かを差し出してくる。
柔らかく目を細めて、喋らないけど、受け取れって言ってるみたいだ。

凜の手に視線を落とし、両手を出してみた。

コロリ…………

そこには、一枚の羽を模ったペンダントヘッドがひとつ。
それは、俺が凜にあげた物だった。
初めて作ったヤツだ。

まだ未熟さの残るソレ。
凜は喜んで貰ってくれた。

あの時の顔が忘れられない。

誰かが喜んでくれることに、幸福を感じた瞬間だった。

顔を上げると、凜がまだ微笑んでいる。

俺も、微笑った。

「
ありがとう」

(後書き)

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

途中でキャラの性格が変わっていないか不安でございませ……

評価、感想、何でも受け付けております。お気軽にどうぞ。

では、本当にありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2345a/>

季節外れの雛罌粟

2008年11月7日07時21分発行